



おちほ

第27号 平成9年2月1日 発行 社会福祉法人 椎の木会 落穂寮 発行者 山下 陽一

いつか(夢)きつと



十二月二十二日(日)、落穂寮では一足早いクリスマス会が行なわれました。今年の装飾は、更に力が入られ、絵や文字が暗闇に浮び上り、プレゼントが空から降ってくるという幻想的で、あつたかくて、皆を神秘の世界へ誘ってくれました。

また、劇団らららによるクリスマス公演も行なわれました。そして、それらを何人かの地域の方々にもみに来て頂きました。クリスマス公演は続編ということで、再び舞台に繰り出した女の子、動物達、そしてサンタクロース。涙あり笑いあり感動ありのただの夢物語りだったのかもしれませんが。それを夢だ嘘だと言ってしまえばそこで終わりになってしまいます。でも信じればそれは本当のことになるはずです。

我々は信じることよりも疑うことに重きを置いてはいないでしょうか。それは、疑う方が自分を傷つけずに済むからです。自分から好き好んで傷つこうという人はいませんよね。でも、少しぐらい傷ついてもいいからって心を決めて、信じることに重きを置いてみてはどうでしょうか。夢物語りが現実となつて繰り出されてくることと思えます。

昔々今ふ

瘦せ蛙の心意気

理事長 増田正司

寮のこともたちが病気になる
職員之苦勞と心配の連続は昔も今
も変わらない。

僕が横浜を引き揚げ落穂寮に赴
任した年(昭和32年)、香港型の流
感(流行性感冒)が全県下に広がり、
とうとう寮生の半数が高熱をだし
てバタバタたおれ、夜昼なしの看
病の職員も半数がダウンしてしまっ
た。患者はますます増えていった。

進退きわまりお手
あげのとき天津君
が訪ねてきた。窮
状にびっくりして
助け船をだそうと
声をかけてくれた。
「部長の田村先生
に話をしろ」と、
その言葉に、がっ
くりしていた僕は
元気づけられ、早
速学園に駆けつけ
応援をお願いした。
すぐOKがでた。
園長先生にお断り
しておけといわれ、

お願いにあがったがNOだった。
「窮状を理事者に訴え、事態の解
決をはかりなさい」と。緊急の事
態だからと再度お願いしたがだめ
だった。親もとへの甘えは許され
なかった。悄然とひきさがってき
たが、もう我一人やるっきゃない
と肚をくくった。胸中熱く沸きあ
がる思いを、疲労困ぱいの職員に
ぶつけ何とか頑張ってほしいと懇
願した。
かつて近江学園に在職した頃、
職員研修の園長講座で「随所に主
となれ」と自覚者について説かれ
た。そのなかで、
上士は恨みに就き
中士は徳に就き
下士は利に就き
下々士は金に就く
すべからく諸君は恨みに就いてほ
しいと述べられた。人材養を心が
けた先生は僕を荒砥(あらとぎ)にかけられた
のか?
倒れて後止むと、職員の奮闘が
続いた。高熱でのたうつ寮生に心
痛めただ祈るしかなかった。大波

小波の一月余がすぎ修羅場をくぐ
りぬけ、元氣回復した全員で明る
い正月を迎えることができた。
学生時代から敬慕し、横浜時代、
親身のお世話になった近藤嬢太郎
先生(元滋賀県知事)が近江学園を
訪ねられた折、滞在中お供して県
内のそちこちにご一緒した。「明
日は、増田君のところでご飯を



▲昭和32年 夏の湖畔学舎「菘の浜」にて

ひとときを過ごし
ていただき、先生
もすっかり寛(くわ)がれ
満足のようすだっ
た。
学園へお送りす
る途中「君は、な
ぜ糸賀君に何でも
相談にいかんのか
ね?」

「先生のお教えと
おもいますが、随
所に主となれと糸
賀先生に教えられ
ました、親に心配
させまいとの思い
もありました」
「もつと素直になつて、相談にい
きなさい。自分だけの知恵でまわ
れるなどと思いがつてはいかん」
親父から優しく諭されたら、先
生の温情にふれ胸が熱くなった。
糸賀先生の配慮も感じられた。他
に学ぶ素直さが足りないことを知
らされ身ぶるい思いだった。
やせ我慢もほどほどにと反省す
るばかりである。

ご馳走してくれ、うどんだけ食べ
させてくれたらいいよ」と突然い
われた。秋の夜風は冷えるからわ
が家得意の鍋料理をさしあげるこ
とになった。お出でになって「お
いしい、おいしい」と連発され食
べていただいた。家族と団らんの

昔々今ふ

一枚の色紙について

寮長 山下陽一

一枚の色紙

田村先生がお亡くなりになってはや一年、先日の十一月八日に一麦寮のグラウンドで「偲ぶ会」が大勢の参加者により催されました。そのときに合わせ、生前田村先生にお世話になった人達を中心に執筆された「追想集」が出版されましたが、それには色紙が添えられておりました。それには、

二つ　一つ　多無良

と揮毫してありました。

このことは三歳の幼児でも知っていますが、これは田村先生が様々におはなしになっておられ、私にはいまだに謎のような内容を含むことばです。先生はその都度的に確にたとえられるので、自分はこのように感じとっている、という方がたくさんおられると思います。が、私にとつての「二つ　一つ」を述べてみたいと思います。

対立の統合か

わたしは最初は二つのものを一つにすること、つまり、対立するものの一致点を見つけて出すことの大切さを述べられていることだと思っていました。しかし、最近それだけではないらしいと思うよう

になりました。

知能指数を測定するとき「始めと終わりの共通点はないか」という設問があるようですが、これに解答できるひとは非常に高い知能指数の持ち主だと判定されます。これは生まれながら授かった能力が試されるようで、誰もが努力により自分のものに獲得できるものではないに違いありません。

「始めと終わりの共通点」を直感的に洞察できる人たちには私たちが逆立ちしてもかないません。田村先生はこのような力を鍛えなさいといっておられるとは思えません。もっと日常生活の中で感じ取ることができ、生活が豊になる知恵の力を育むことの大切さだろうと思います。

「対」のはたらき

中国の古い思想では、世の中の現象を「陰」と「陽」で説明しようとしてきました。光と影の現象は物理的にみても日向と影の間には連続しており、その境目ははっきりしていません。「陰」と「陽」においてこれらの要素を決定するものは「氣」で、これが「動」の状態のときは「陽」となり、「静」の

ときは「陰」になるようで、それぞれ凝縮したり、希薄になったりするにより金、木、水、火、土に形態を変えるという捉え方です。おそらく、田村先生は対立しているものが二つ存在しているのではなく、「陰」と「陽」の間のように表面的には両端のように見えるけれども、その実は変わらないものから発しておりこれらが無限に連続していることの両端を洞察しておられたのではないかと思えます。

たえば、「善」と「悪」は相対抗するものではなく、あるいは過ぎ、あるいは及ばざるものに名づけたものにほかならないというのです。

対ということ

落穂寮に入所している人達の障害によつては、のべつ暇なく動きまわっているひと、また逆に放っておけばいつまでも同じ姿勢でいる人がおりますが、人にとつて「動」と「静」を適当に配分している行動は問題ないとされますが、このバランスが偏ってしまうと問題行動とされます。私たちの行動は、ちょうど中心が二つある楕円のようなものではないかと思えます。これらふたつで対となっており、丸く安定した存在になっている。

「二つ一つ」というのはこのよ

うなことではないかと思えます。また、中国のふるいたとえ話しに次のようなものがあります。石臼で粉をひくことができるのは、接している面が上下ふぞろいで回転しているから、粒を細かい粉として、つぶし出すことができる、ということですが、このたとえげなしも二つ一つを考えるとときの手立てになるものと思えます。

二つ一つ、一つ二つ

あるクラスに障害の重い子どもがいます。そのクラスに腕白で乱暴な男の子がいるのですが、なぜかその障害のある子どもにだけは対応がやさしいのだそうです。おとなたちはその子のために放っておいてほしいと思うようなことでもあれこれと面倒をみてくれていて、「やさしさ」といったような、きかないことは沢山あると思えますが、先の例を考えると実践の進め方に田村先生の「二つ　一つ」の中に探ることができるように思えます。そして、「二つ　一つ」の下の句に「一つ　二つ」が付加えられることにより「対」となっているように思われます。先程のひき臼の例ではありませんが、「二つ　一つ」の思想からどのような事が粉としてひき出されるのか宿題は山積しています。

長崎、北海道、沖縄。11年前に年長旅行が初めて実施されてから3度目となった飛行機を利用しての沖縄旅行でした。しかし、そのメンバーはガラリと入れ替り、前回の北海道旅行の経験者は、



きれいだな一。

んでした。さて、いよいよ出発。すったもんだの挙句、何とか乗れたものの、こんな時にかぎってひどい揺れ。寮では大暴れしそうな人も、そんな余裕はないらしく、顔をこわばらせ、シ



わ——つはつはつは一。

。見て楽しみ、味わって喜び、皆、それぞれの思い出をたくさん作って帰ってきました。ところが、帰りの「ひこうき」は、もっともっと大揺れ。気分の悪くなった人もいて、大阪に着いた時には、疲れた様子の一行でした。20時30分、2泊3日の旅行は無事に怪我も事故もなく、その行程を終えることができました。

「落穂寮作品展」
▽皆さん。昨年度に引き続き、今年度も寮生さんの独特な世界を感じていただくとうと、作品展を催します。ぜひ、見にきて下さい。
日時 平成九年
二月十二日(水)午後1
十八日(火)午前

泉

場所 石部町文化ホール一階
▽新しい年を迎えて、みなさん、いかがおすごしでしょうか。
落穂寮にとっては、とても重大な岐路に立つ年と言えます。そうです、成人施設化の問題です。どうか現実のものとなりますよう、皆さんの御協力をお願いします。

40人中、寮生13名、職員2名のあわせて15名だけ。寮生・職員ともども不安と緊張の中での旅行となつたのです。更に、「ジェットコースター」すら恐ろしくて乗ることができず、「観覧車」がやっとの寮生さんが、果して「ひこうき」なるものに乗れるかどうか、何とか乗れたとしても、機内でパニックに陥ったら…と心配の種はつきませ

初めて訪れた沖縄は、とてもすがすがしい気候で迎えてくれました。東南植物楽園でのフルーツジュース、琉球村での黒糖作り、ハブとマンゴーのショウを見たあとの試食のバイナップル、ちよっと寒かったけど、とても綺麗な沖縄の海、平和記念公園でのランの花とイルカショー

「ひこうき」に、もう2度と乗りたくないと思つた寮生さんと、もう2度と乗せることができないだろうと思つた職員に『ごくりうさまでした。』

おいしかったな一。



なんだるな一。



「近年、無精になったものだ。気付かれないところで役に立っていたら、本当に気付かれない。当り前の事のようにだが、本当は一所懸命にがんばっているのに。老えば切り捨てられる。邪魔だと煙たがられる。もつとかわいがってほしいが、「き」がない証拠かな。」
耳の痛い声がかきこえてくる。

木言

「近年、無精になったものだ。気付かれないところで役に立っていたら、本当に気付かれない。当り前の事のようにだが、本当は一所懸命にがんばっているのに。老えば切り捨てられる。邪魔だと煙たがられる。もつとかわいがってほしいが、「き」がない証拠かな。」
耳の痛い声がかきこえてくる。